

## B-4 係り結び現象を生む述語の機能—通方言的な視点から—<sup>1</sup>

林由華（国立国語研究所／日本学術振興会） yufaster@gmail.com

### 1. はじめに

琉球諸語や八丈語には、日本語古典語における係り結びに対応する現象があることが知られている。本発表では、諸方言における結び形となる述語の情報構造上の機能を見ることで、現代に生きる諸方言の係り結びがどのような機能的背景を持つ現象なのか、また諸方言の係り結びをどのように類型化できるのか考察することを主な目的とする。

【背景】「係り結び」には複数の定義が存在するが、本発表では、特定の係り助詞が文中にある場合に、通常主節述語として現れない述語形が現れる現象を指すこととする（呼応が義務的でない場合も含める）<sup>2</sup>。古典語におけるいわゆるゾ・ナム・ヤ・カー連体形終止、コソー已然形終止に対応するものであり、これらは狭義係り結びといわれ、係助詞が焦点位置を示す焦点構文としても知られている。本発表では、この場合の係り要素を係り助詞もしくは焦点助詞とよび、それと共起する場合以外では通常主節述語として現れない述語の形を結び形とよぶ。古典語でも、また琉球諸語でも指摘されているように、これらの係り助詞と結び形の呼応関係は完全な一対一対応ではなく、ある係り助詞がさまざまな述語形と共起したり、結び形が係り助詞なしに出現することもある。つまり、係り助詞と対応する結び形は、それぞれ個別に機能しうるものである。琉球諸語においては、下地の一連の研究により（下地 2015, 2017, Shimoji 2018 など）、琉球諸方言全般に見られる係り助詞 du のもつ焦点機能の通方言的記述・類型論的研究が進んでいる。しかし、結びの述語形には形式的にも複数タイプあり、これまでその機能について統一的に検討されることはなかった。

【主張】係り助詞（焦点助詞）と共起する結び形には、諸方言を通じて共通した情報構造上の特徴がある。それは、結び形が主節述語となる場合は文の焦点範囲が項側にある（もしくは項側から始まり述語も含む）ということ、これは係り助詞がない場合でも観察できるものである<sup>3</sup>。ここで重要なのは、係り助詞（焦点助詞）だけでなく、述語にも文の焦点構造を指定する機能があるということである。係り助詞と結び形が関わる焦点構造の標示には、係り助詞のみ、結び形のみ、その両方という3パターンがあり、このうち3つ目が係り結び、つまり係り結びは、項側（係り助詞）と述語側（結び形）による二重の焦点標示であるといえる。このように考えることで、結び形を持たない方言も含め、諸方言における焦点構文の在り方や焦点標識としての係り助詞、結び形の機能を見通しよく連続的に捉えることができる。もう一方で、結び形を持つ機能として、それ自体が強調の意味を持つ方言とそうでない方言があることを示す。これは、上述した下地の研究によって示された各方言がもつ係り助詞（焦点助詞）側の機能と相関している。

### 2. 準備

#### 2.1 「焦点」について

##### du の焦点助詞としての機能について

ここでは琉球諸語・八丈語の焦点助詞（焦点構文）がもつ機能・用法を詳しく扱うことはせず、本発表に関連性の高い点にのみ言及する。本研究でまず問題とするのは、情報焦点／対比焦点<sup>4</sup>という2種類の焦点タイプの区別である。諸言語で形式的に「焦点構文」とされるものがもつ焦点機能にはしばしばこれに類する2タイプに分けられる。情報焦点と対比焦点は共に情報構造上の「新情報」を表すが、対比焦点のほうは、そこに対比・強調的な意味が加わったものである。対比焦点の典型的な用法としては、「XでなくY」のような情報修正を行う場合があげられる。対比焦点は他の候補から卓立させる「強調」的な意味を持つものであり、対して情報焦点は単に新情報を提示するのみで、特に「強調」のニュアンスは持っていない。(1) は du が対比焦点のみを示す沖縄語津波方言、(2) は du を情報焦点に用いることができる宮古語池間西原方言の例であり、それぞれ a: 「何を食べたの？」 b: 「魚を食べたの？」の応答である。

- (1) a. umu kadan=do: (芋 食べる.PST=SFP) 「芋を食べたよ」【情報焦点】  
b. umu=du kadan=do: (芋=FOC 食べる.PST=SFP) 「(違う,) 芋を食べた」【対比焦点】  
(2) a. nn=nu=du fautai=do: (芋=ACC=FOC 食べる.PST=SFP) 「芋を食べたよ」【情報焦点】  
b. nn=nu=du fautai=do: (芋=ACC=FOC 食べる.PST=SFP) 「(違う,) 芋を食べた」【対比焦点】

<sup>1</sup> 本研究は、JSPS 特別研究員奨励費（課題番号 17J10117）の助成を受けたものである。本稿に関わるアイデアについて、衣畑智秀氏、浅尾仁彦氏、ケナン・セリック氏に、有益な助言をいただいた。また、諸方言の調査にあたっては、各地を専門とする研究者にご助力いただいた。本調査が諸氏が各地で築いてきた信頼関係を基にして成り立っていることに、心より感謝申し上げます。

<sup>2</sup> 発表者は、ある係り助詞（焦点助詞）と特定の述語形の義務的一致の有無を問うのはこれらの形式の働きを解明するのにあたって本質的ではなく、どれだけの述語と共起できるかは連続的なものとして捉えるべきであると考えている（4.2 節参照）。

<sup>3</sup> 八丈語についてはこれとは異なる性質を持つ可能性があるが、本発表では扱わない。

<sup>4</sup> これに類した2種の区別については、contrastive/information focus 以外にも、contrastive/ordinary focus, identificational/information focus などさまざまな呼び名があり、区別をどう規定するののかも研究ごとに異なることもある（Matić and Wedgwood 2013）。

通言語的には、特定の焦点構文が持ちうる焦点機能として「対比焦点>情報焦点」の含意階層があるとされている (Skopeteas and Fanselow 2010)。琉球諸語全般に見られる焦点助詞 (係り助詞) *du* の機能においても、下地 (2015, 2017 など)、Shimoji (2018) により、情報焦点と対比焦点の両方を表す方言と対比焦点のみを表す方言があることが分かっており、Skopeteas and Fanselow (2010) によって示された「対比焦点>情報焦点」の含意階層が見られている。下地の一連の研究では、琉球諸語諸方言における *du* の表れを説明するため焦点タイプを3種に分けているが、本発表ではひとまず単に情報焦点/対比焦点の区別を見る<sup>5</sup>。本発表で問題とするのは、各方言の焦点構文が「情報焦点」としての機能をもつかどうかという点である。ここではこのことを、ただの新情報の提示に用いることができるか、もしくは焦点構文が「強調」の意味を必然的に伴うか、という観点から見る<sup>6</sup>。

#### 焦点標識の出現位置と焦点範囲の対応関係について

諸方言における焦点標識の出現位置と焦点範囲 (意味的に焦点となる範囲) の対応関係については詳細な調査・考察が済んでおらず、本発表で詳しくは扱えないが、本発表における主張の形 (結び形の機能の記述・一般化) に関係があるため、簡単に触れる。

形式的に同一の焦点構文 (焦点標識の位置が同じ) でも、焦点範囲の解釈において多義性をもつことはさまざまな言語で観察されるが<sup>7</sup>、例えば琉球諸語宮古語においても、以下のように、*du* が付与された句のみが焦点範囲となる場合と、より広い範囲を焦点範囲としてとることがある。次の宮古語池間西原方言の例 0 は、まったく同形の *du* 焦点構文が異なる焦点範囲をとりうることを示している<sup>8</sup>。

- (3) a. *miga=a f[ssara=nkai=du] ifutai* (ミガはどこに行ったの?) 「ミガは平良に行った」  
 b. *miga=a f[ssara=nkai=du ifutai]* (ミガはどうしたの?) 「ミガは平良に行った」

ここでは紙幅の都合上詳細な情報を省くが、本発表においては、(3) のように、*du* のついた要素だけでなくそれより後も焦点範囲に含みうる場合がある、つまり焦点標識が示す焦点範囲はそれが付与された要素のみ (狭い) 場合とそれより広い場合があることが把握されていればよい。

## 2.2 調査の概要および各地の係り助詞と結び形

本発表で用いるデータは、主として発表者が 2017 年 4 月~2018 年 3 月にかけて行った琉球および八丈の各方言における面接調査で得られたものである。喜界志戸桶方言については、白田理人氏の提供による。以下では、本発表に関わる項目について、各地の特徴を整理する。

本発表で観察対象とする形式は、主として琉球諸語全般に見られる係り助詞 (焦点助詞) *du* (とその対応形)<sup>9</sup>、およびその結び形であり、中でも結び形の情報構造上の機能を見るのが目的である。結び形とは、冒頭でも述べた通り、「焦点助詞に対応して現れる通常は主節述語として現れない述語の形」である。琉球諸語の *du* は古典語ゾに対応するのに対し (Shinzato and Serafim 2013 など)、八丈語の焦点助詞 *ka* (/ko:) は古典語コソに対応する (金田 2001) のものとされるが、両者は焦点助詞として部分的に共通の機能を持っている。ただし、八丈語は他とは異なる振る舞いもあるため、本発表では4節の考察で触れるにとどめている。結び形については、共時的に **A** : 形式的に連体形と同形の方言、**B** : (連体形などその他の形式と同形式でない) 固有の形を持つ結び形がある方言、**x** : 結び形が存在しない方言がある。表 1 は、本発表で言及する調査対象方言において (i) 結び形が A, B, x のパターンのうちどれか (ii) 係り助詞 (K) なしに結び形 (M) が出現できるかどうか (iii) 係り助詞 *du* が単なる情報焦点を表せるかどうかを整理したものである。また、係り助詞が存在しそれが対比焦点機能をもつこと<sup>10</sup>、係り助詞があっても結び形と呼応せず別の述語形が出現

<sup>5</sup> 下地 (2015, 2017)、Shimoji (2018) では、諸方言の *du* が①WHQ 焦点、②WHA 焦点、③対比焦点 (Contrastive Focus) のいずれの焦点機能をもつかについて調査・整理されている。下地の一連の研究では、琉球諸語諸方言において、対比修正用法>WH 応答用法>WH 用法の含意階層となっていることを示している。地域ごとの傾向としては、北琉球の諸方言の焦点助詞 *du* には主として対比修正用法のみ、南琉球の諸方言ではそれに加え WH 応答用法、WH 用法を持ち、南北にその中間の方言 (WH 用法のみがない) がある。Shimoji (2018) では、各地の *du* の現れ方を左右するパラメータとして、[±contrastive]、[±exhaustive]、[±new information] という3つのパラメータを設定しており、対比焦点は [+contrastive] かつ [+exhaustive] となる場合としている。本発表では、単に新情報のみで特に付加的な意味がないかどうかの問題となるため、Shimoji (2018) における Contrastive Focus とここでの「対比焦点」では、それが示すものにずれがある。

<sup>6</sup> 実際には対比焦点のすべてのケースを「強調」で特徴付けるのは難しいが、本発表での議論では便宜上この性格付けを用いる。

<sup>7</sup> narrow/broad focus や focus projection とされるもので、例えば、英語の "I bought a book." という文において book の部分にイントネーション上のアクセントを付与した場合 (BOOK と大文字で表現する)、I [bought a BOOK]F と I bought [a BOOK]F の2種類の焦点解釈が可能である。

<sup>8</sup> 宮古語、八重山語などでは、*du* が焦点範囲の最も左の句に付与される、つまり *du* のついた要素以降はすべて焦点範囲になりうるかと一般化できる (詳細は Davis 2013、林 2017 などを参照)。

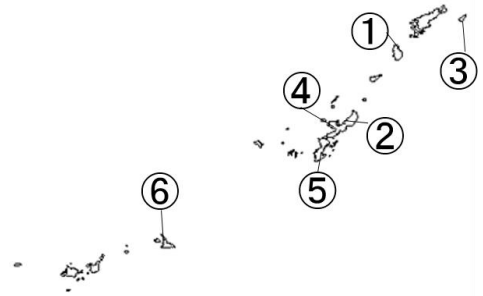
<sup>9</sup> *du* 以外にも、北琉球に *kusee*, *ga*、南琉球に *ga*, *nu/ru* などの係り助詞がある。

<sup>10</sup> 対比焦点とひとくくりになっているが、方言ごとに用いることのできる用法に違いがあると考えられる。本発表では詳細は割愛する。

する可能性があることはすべての方言にいえるため<sup>11</sup>、表に含めていない。なお、係り助詞の形式は、名瀬安和で ru、それ以外の地域で du である。

表 1：主な調査地点

大地域	中地域	番号	方言	結び形	KなしMあり	情報焦点
北琉	徳之島	①	井之川	×	×	×
	沖縄北部	②	津波	×	×	×
	喜界	③	志戸桶	B	×	×
	沖縄北部	④	名瀬安和	B	○	×
	沖縄南部	⑤	首里	A	○	×
南琉	宮古	⑥	池間西原	A	△	○
	八丈		大賀郷	B	○	×



志戸桶、名瀬安和、首里の結び形は、語幹に接尾辞の -ru を付与することで形成される。古典語では一部の活用クラスでのみ終止形と連体形（結び形）の形式的区別があるのに対し、これらの方言の結び形はすべての活用クラスで形成される。また、首里では結び形が連体形と同形であるのに対し、志戸桶及び名瀬安和では結び形と連体形とは異なる形式である。宮古語では特別な接辞を伴わない連体形と同形、八丈語では結び形固有の形（已然形由来、金田 2001）が現れる。

①井之川と②津波は、係り助詞 du はあるが、対応する結び形とみなせるものが存在しない。③志戸桶は対比焦点を表す du があり、それに対応する結び形（連体形とは別形式）もあるが、結び形が du なしで出現しない。本発表では係り助詞なしの結び形単独での機能を観察できる④名瀬安和、⑤首里のデータ、du が単なる情報焦点の機能をもつ⑥池間西原のデータを主として扱う。

また、情報焦点をとれるかどうかについては、対比の文脈にならないようコントロールした疑問詞疑問文に対する応答部分に、強調を伴わないプレーンな形式として du が出現できるかどうかを見た。

なお、本発表における表記では、接辞境界は特に標示しない。

### 3. 結び形の持つ情報構造上の機能

かりまた (2011) では、那覇方言において、du を含む文の文末に現れる述語形として、「断定形」と「強調形」をあげている。「断定形」は本発表でいう「焦点中立終止形」（後で説明）、「強調形」は「結び形」にあたる。かりまたは、「那覇方言の強調形を述語にもつ文は、=du をふくみながら断定形を述語にもつ文にくらべると、話者のつよい主張がふくまれる（かりまた 2011:70）」としている。また、「強調形」（結び形）が係り助詞なしに出現し、話者の強調を含む文となることも指摘している。本発表では、那覇方言に近い首里方言の例から、「強調形」（結び形）は単に強調を示しているだけでなく、情報構造上の制限を持った形式であり、その点で「断定形」（焦点中立終止形）と異なっていることを示す。また、これと類似する情報構造上の制限を持った結び形は南琉球（池間西原方言）にも存在するが、池間西原方言の場合は「強調」は含意しないことを示す。即ち、本発表の主張である「結び形は焦点範囲が項側にある（もしくは項側から始まり述語も含む）ことを示す述語形」であること、また「結び形自体が強調の意味を持つ方言とそうでない方言がある」ことを、係り助詞なしに結び形が出現できる名瀬安和方言および首里方言、また結び形が特に強調の意味を伴わずに現れる池間西原方言のデータから示す。なお、データの容認性の程度については、記号なし：自然に使用・許容できる ?：もっとも自然なわけではないが使用・許容できる ??：あまり使わないが許容できる \*：許容できない #：意図した解釈にならない で標示する。

#### 3.1 沖縄語名瀬安和方言・首里方言

(4)(5) に示すように、名瀬安和方言 (4)、首里方言 (5)の係り助詞は、結び形とともに対比焦点を標示して現れる。また、同じ文で述語が結び形のまま、係り助詞がない場合でも許容される。

(4) ?ju:={ru/=φ} kadamu. (魚={FOC/=φ} 食べる.PST.MSB) 「(てんぶら食べたの?) (違う,) 魚を食べた」

(5) φisa=nu{=du/?=φ} ndʒutʃuru. (足=NOM{=FOC/=φ} 動く.PST.MSB) 「(手は動かないが) 足が動く」

(4) (5) では名瀬安和でも係り助詞ありの文が初出するほか、首里では係り助詞があるほうがより自然であると判断されるが、係り助詞なしでの使用は可能である<sup>12</sup>。ただし、係り助詞がない場合でも「強調」の意味が保たれるため、WH応答焦点における自然な応答表現にはならない。この場合は、焦点中立終止形（かりまたのいう断定形）を用いる (6: 名瀬安和)。

(6) ?ju: {kadan=do:/#kadamu}. (魚 {食べる.PST.FNS=SFP/食べる.PST.MSB}) 「(何食べたの?) 魚を食べた」

<sup>11</sup> 係り助詞 du と共起する述語形は多いが、共起できない述語形もあり、Shimoji (2011) では宮古語伊良部長浜方言においてこのような係り助詞と述語の共起関係を "negative concordance" としての係り結びとしている。

<sup>12</sup> ここでは結び形が述語の場合のみ提示しているが、du がない場合は焦点中立終止形のほうが好まれる。

しかし、結び形にはただ強調の意味があるだけでなく、この結び形を述語とする文には情報構造上の制限がある。以下のように、述語より前に焦点の入り得る可能性のない<結び形のみ>の文、あるいは<主題—結び形>の文では、強調の意味があっても、結び形は全く許容されない。この場合も、焦点中立終止形（断定形）が現れる（7: 名護安和、8: 首里）

(7) {kadan=do:/ \*kadaru} ({{食べる.FNS.PST=SFP/ 食べる.PST.MSB}) 「(ごはんまだ食べてないの?) 食べたよ」

(8) {ndzutjun=do:/ \*ndzutjuru} ({{動く.FNS.NPST=TOP/ 動く.NPST.MSB}) 「(動かないの?) 動くよ」

焦点中立終止形は、その名の通り情報構造上の制限を持たず、du の結び形としても出現可能である。このように、結び形と焦点中立終止形は、強調のあるなしだけでなく、出現できる環境が異なっている。これらのことから、結び形は du なしでも出現できるが、ただ強調を示すだけでなく、前方に焦点となり得る項が必要であると考えられる。

### 3.2 宮古語池間西原方言

宮古語では、典型的な終止形と連体形の区別がなく、係り助詞と述語形が呼応するという意味での係り結びはないとみなされることがほとんどである。しかし、この「終止連体形」は、TAM の観点からも、また情報構造の観点からも、日本語や北琉球語に見られるような終止形の機能を持っていない<sup>13</sup>。この述語形は、項側が焦点範囲に含まれる（du が項側にある）場合にしか使用できず、述語が単独で焦点範囲となる文の場合は、別の述語形（述語焦点形）を用いる必要がある<sup>14</sup>。

(9) a. umanagi=n=na ta:=nu=du ai (このあたり=DAT=TOP 田=NOM=FOC ある.MSB.NPST) 「このあたりには田がある」

b. umanagi=n=na ta:=ja {aidusi/\*ai} (このあたり=DAT=TOP 田=TOP {ある.FOC.NPST/\*ある.MSB.NPST}) 「(田はあるのか?) このあたりには田はある」

このように、池間西原方言の「終止連体形」とされてきた形式は、「係り助詞が共起する場合以外では通常主節述語として現れない述語の形」<sup>15</sup>であり、前節で見た焦点中立終止形よりもむしろ結び形と同様の情報構造上の特性を持っている。ただし、前節でみた名護安和や首里とは異なり、そのものの意味として「強調」を含意しない。(9a) も、通常のWH疑問文への応答である。また、池間西原方言の du は単に新情報を標示する形式であるため、特に先作文脈がない (10) のような場合でも出現する。

(10) unu ningjo:=ja tii=nu=du mujutsi=do: (この 人形=TOP 手=NOM=FOC 動く.MSB.NPST) 「(新しく買った人形を見せながら) この人形は手が動くんだよ」

ここでも同様、述語より前の項に焦点が入りえない (9b) や下記 (11) などの例では、述語焦点形が用いられる。池間西原方言は、焦点中立終止形は持たないのである。

(11) unu ningjo:=ja {mujutsidusi/\*mujutsi}=do: (この 人形=TOP {動く.FOC.NPST/ 動く.MSB.NPST}) 「この人形は動くよ」

### 3.3 小括

3節では、名護安和・首里方言における結び形が、「強調形」と呼ばれてはいても前方に焦点がある場合にのみ用いられること、また池間西原の結び形とみなせるものが情報構造上は似た機能をもつが、強調の意味合いはないことを示した。結び形は、文の焦点構造やその焦点の種類を制限する機能をもつものであるといえる。またそれが許容する焦点範囲について、池間西原方言では、2節でも示したように、項側とともに確実に述語も焦点範囲に含みうるということが分かっている（林 2017 など）。これらの要素を考え合わせ、各地の結び形は、項側に焦点範囲がある／項を含んで述語も焦点範囲に含まれるという焦点構造をもつものであると一般化しておく。結び形が必ず du と共起する方言においては、述語単独の機能とはいえないまでも、このことは自動的にあてはまることになる。また、この情報構造上の性質を同じくする結び形においても、焦点タイプとして対比焦点（強調あり）を指定する方言と、特に強調は含意しない情報焦点にも用いられる方言があることを示した。

## 4. 考察

### 4.1 諸方言における「係り結び」とは

3節では、本発表で結び形とする形式が、情報構造上の制限を持って現れるものであることを見た。琉球諸語のすべての方言は係り助詞 du をもつが、結び形がある方言においては、項側と述語側の両方で焦点構造を二重に標示しているといえる。係り助詞および結び形を用いた焦点構文には、①係り助詞のみ (K-) ②

<sup>13</sup> 詳しくはセリック・林 (2017) を参照。

<sup>14</sup> Hayashi and Takubo (2009)、Takubo and Hayashi (2012)、林 (2013) などでは、これを池間西原方言における係り結びとしている。

<sup>15</sup> 芝居の台本のト書きなど、ごく限られた場合に du なし結び形終止の文が現れる。また、結び形を補助動詞とする補助動詞構文（テイル相当）の場合では、眼前描写の場合や特定の終助詞が付いた場合などで du なしのほうが自然である場合もある。ただし、宮古語内でも方言差があり、また焦点位置に du を付与するのはすべての環境で必須というわけではなく、出現可否の決定には情報構造以外の要素が働いている（林 2016 参照）。

係り助詞と結び形の両方 (K-M) ②結び形のみ (-M) の3パターンの焦点構文がありえ、そのうち②が、「係り結び」と呼ばれる現象になっているということになる。表2は、各方言でこれらのどのパターンがありえるかということと、また④係り助詞もしくは結び形が関わる焦点構文が情報焦点 (IF) をとりうるかということ、さらに⑤焦点中立終止形 (FNS) があるかどうかについて整理したものである。

表2：各方言の係り助詞や結び形を用いた焦点構文のパターン

		①K-	②K-M	③-M	④IF	⑤FNS
A	井之川、津波	○	×	×	×	○
B	志戸桶	○	○	×	×	○
C	名護安和、首里	○	○	○	×	○
D	池間西原	○	○	△	○	×

④の情報焦点機能の有無では、主として du がどのタイプ焦点機能をもつのかについての結果を記しているが、現時点では3節で示したように、係り助詞と結び形で焦点機能が連動している傾向が見られる。本論では扱わなかった八丈語大賀郷でも、名護安和や首里と同様、係り助詞なしに結び形が現れることができ、その場合に係り助詞がある場合と同様の焦点用法をもつと考えられる。紙幅の都合上詳細はここでは述べられないが、ここまでの調査では大賀郷の係り助詞は琉球諸語のそれより焦点機能が狭いと考えられ、係り助詞なし結び形のみのもので、それに準じた焦点機能が現れる。さらに、発表者による調査では、情報焦点機能のある池間西原方言以外では、係り助詞、結び形の出現は対比焦点の文脈でも一部を除きほぼ義務的ではなかった<sup>16</sup>。それらの方言では、焦点構文の使用は強調を強めるためのオプションといえるのかもしれない。それに対して池間西原方言においては、特に直説法現在の表現では、義務的に焦点を明示する（係り助詞や適切な焦点特性を持つ述語形を用いる）必要がある。⑤で池間西原方言にのみ焦点中立終止形がないのも、池間西原方言における形態論的な焦点構造標示の義務性の高さを表している。

この焦点構造の二重の標示は、フランス語に見られる ne...pas による二重否定に近似したものとして捉えることができる。現在フランス語では ne...pas でも ne, pas それぞれ単独でも否定を表すことができる。フランス語では歴史的に ne のみが否定の意味を持っていたが、ne...pas 構文から pas も単独で否定の意味を持つようになったことが知られている (Horn 2010 など)。本発表では係り助詞・結び形が関わる焦点構文の成立と発展については扱えないが、現在結び形が係り助詞と同様の焦点機能、係り結び構文で出現する場合の焦点範囲指定を備えているのは、このような経緯があった可能性もあると考えられる。

以上では、係り助詞と結び形が関わる構文について、その情報構造特性に限って観察した。ただし、係り助詞や結び形の働きは情報構造だけでは説明できず、一方に複数の係り助詞がある場合にはそれが文タイプによって使い分けられたり (かりまた 2011、衣畑 2017 など)、係り助詞の出現可能性が述語モダリティやテンスなどとも連動したりする (林 2016)。これら様々な要素も含めた諸方言の係り助詞、結び形の振る舞いについては、現時点ではまだ明らかでないことが多い。

#### 4.2 古典語における焦点構文との関連性

古典語の「係り結び」は様々な観点から検討されているが、情報構造の観点から精査したものにフィアラ (2000) があげられる。フィアラは上代日本語の情報構造の類型の対立について、「無標の情報構造の文型 (通常の「客観的語順の文型」) と有標の情報構造の文型 (「主観的語順」のある「(狭義) 係り結びの文型」) の間に生じ (フィアラ 2000:320)」としている。情報構造の類型を決定するのに最も重要なのは有標の情報構造の文型 (狭義係り結び) における係り助詞 (焦点助詞) とみなされるが、本発表で諸方言について見てきたように、述語側にもその機能が十分にあった可能性は低くはないだろう<sup>18</sup>。また、発表者が言うまでもなく、古典語の係り結びもまた情報構造だけで説明できるものではない。例えば、特定の係り助詞が一定のモダリティをもつ述語形と共起することなども知られている (高山 2002 など)。古典語においても現代方言においてもこれらの種々の要素は互に関連し合っており、総合的に検討しなければその振る舞いは説明できないと考えられる。

かりまた (2011) では、係り結びが「係り助詞と結び形の義務的な呼応」のことを指すとしたうえで、係り助詞と共起する述語形が多くある琉球諸方言には、(古典語と同じものとしての)「係り結びはない」としている。しかし、古典語でも絶対的な呼応はなく、単に時代によっては呼応する確率が琉球諸語より高い (あ

<sup>16</sup> 対比焦点でも、「du があったほうがよいがなしでもよい」という場合が多く、初出文が du なしのこともあった。しかしこれは Shimoji (2018) において報告された傾向と異なっており、方言によって異なる可能性がある。

<sup>17</sup> (狭義) については発表者の追記。

<sup>18</sup> この点で興味深いのが、竹内 (2015) の観察である。竹内は、係り結びが衰退していたと考えられる中世 (宇治拾遺物語) において、連体形節と終止形節が主語標示と協調して異なる焦点範囲を指定していたことを示している。また、係り結び構文における焦点範囲については、係り結びに対して疑似分裂文としての分析を行うものを中心として、係り助詞が焦点、結び形が前提 (非焦点) を表すとする分析がある一方で、小田 (1989) や勝又 (2009) などの観察からは、係り助詞の付与された要素から述語までを焦点範囲に含みうる場合もあると考えられる。

るいは高く見える) だけであり、どのくらいの確率で呼応するかは、各言語における係り助詞や各述語形の用法の狭さなどに依存している可能性が高いと考えている。例えば3節で見た焦点中立終止形の有無や、古典語が動詞形態論内に豊富なモダリティ接辞をもち、ひとことに結びの連体形といっても様々なモダリティを持ちうることも、呼応の確率に影響するであろう。古典語においても係り結びを形態統語論上の義務的な一致と捉えない研究も多く、例えば山田(2004)では、「係り助詞(I・II)は、述部の諸活用形に選択されて出現し、原則としてそこに義務的な関係はない(山田2004:(15))」としている。これは琉球諸語の係り助詞(焦点助詞)に関するかりまた(2011)の見解とほぼ同様である。山田やかりまたは主にモダリティや文タイプなどについて述べているが、本発表も、観察対象が情報構造というだけで、これに類する発想である。すなわち、係りと結びが呼応するのは、それが互いに連動した情報構造上の機能を持っているため、それゆえ同時に使用される場合があるということである。ただし、方言によっては双方が同時に現れる特殊な強調構文としての傾向が強い場合もあると考える。その共起の義務性の高さも、言語間の違いを示す変数になりうる。諸方言の係り結びと古典語の係り結びは連続的に捉えられるものであり、この現象をより正確に捉えるためには、双方共に記述できるフレーム、変数を整えていくべきであろう。

## 5. まとめと展望

本発表では、主に琉球諸方言の結び形について、それ自体が焦点構造や焦点機能を指定すること、焦点機能については方言ごとに異なるが、同一方言内の係り助詞のもつ焦点機能と連動していることを見た。本発表は発表者による諸方言の係り結びについての予備調査の結果を基にしており、現時点で未調査の八重山、与那国地域も含め、さらなる調査・考察を進める予定である。

本研究は諸方言が共時的に持つ係り助詞・結び形の機能を類型化するのが主眼であり、琉球諸語についても古典語についても、その起源説や成立論はまだ射程に入っていない。ここでの主張が係り結び発生の初期状態には当てはまらない可能性も十分ある。しかし、各方言、また各時代におけるパターンを十分に記述、類型化することは、より正確な歴史研究にもつながるものとする。

また、このように焦点標識にモダリティ・エビデンシャルリティなどの他の機能が抱き合わされる現象は他言語にも観察されており(Matić and Wedgwood 2013)、その中には項焦点と述語焦点で異なる標識をとるものもある(ソマリ語など、Saeed 2004)。そのような言語の中でも日本語古典語ほど豊富な種類の焦点助詞を持つものは管見の限りなく、焦点と他の機能カテゴリーの関係に関する類型論的にも貢献するところが大きいと考えられる。焦点助詞(係り助詞)と述語形の一致関係だけに着目した場合、係り結びに類する現象を持つ言語は多くないとされているが(Whitman 2015)、前述したような言語との対照研究を進めていくことで、よりこの現象に対する理解が深まることが期待できるだろう。

## 略号一覧

ACC:対格, FNS:焦点中立終止形, FOC:焦点, MSB:結び形, NOM:主格, NPST:非過去, PST:過去, SFP:終助詞, TOP:主題

## 参考文献

- セリック, ケナン・林由華 (2017) 「宮古語における終止連体形の定動詞性と動詞活用体系の歴史的発展の関係」『日本言語学会第154回大会予稿集』248-253./ Davis, Christopher (2013). Surface Position and Focus Domain of the Ryukyuan Focus Particle *du*: Evidence from Miyara Yaeyaman, IJOS:International Journal of Okinawan Studies.4.1:29-49./ フィアラ・カレル『日本語の情報構造と統語構造』ひつじ書房 Hayashi, Yuka and Yukinori Takubo (2009). Kakarimusubi in Ryukyuan. Presented at Workshop on Ryukyuan Languages and Linguistic Research, UCLA, Los Angeles, U.S.A.(2009-10-25)/ Takubo, Yukinori and Yuka Hayashi (2012). Kakari Musubi in Ikema Ryukyuan. Presented at JK 20th, Oxford University, Oxford, UK.(2012-10-2)./ 林由華 (2013) 「南琉球宮古語池間方言の文法文法」京都大学文学研究科博士論文./ 林由華 (2016) 「南琉球宮古語池間(西原)方言における焦点助詞 *du* と述語動詞モダリティの相互関係」『日本言語学会第152回大会予稿集』144-149./ 林由華 (2017) 「南琉球宮古語池間西原方言における *du* 焦点構文と述語焦点形」『阪大社会言語学研究ノート』15:87-99./ 金田章宏 (2001) 『八丈方言動詞の基礎研究』笠間書院/ かりまたしげひさ (2011) 「琉球方言の焦点化助辞と文の通達的なタイプ」『日本語の研究』7(4):69-82./ 勝又隆 (2009) 「語順から見た強調構文としての上代「—ソ—連体形」文について」『日本語の研究』5(3):80-95./ 衣畑智秀 (2016) 「南琉球宮古語の疑問詞疑問係り結び—伊良部集落方言を中心に—」『言語研究』149:1-24./  
Matić, Dejan and Daniel Wedgwood (2013). The meanings of focus: The significance of an interpretation-based category in crosslinguistic analysis. *Journal of Linguistics*, 49:127-163./ 小田勝 (1989) 「出現位置からみた係助詞「ぞ」」『国語学』159./ Saeed, John I. 2004. The focus structure of Somali. In Brian Nolan (ed.), RRG2004: The International Role and Reference Grammar Conference, 258-279. Dublin: Institute of Technology Blanchardstown./ Shimoji, Michinori (2011). Quasi-Kakarimusubi in Irabu. In W. McClure and M. Den Dikken (Eds.), *Japanese/Korean Linguistics*, 18:114-125. CSLI Publications./ 下地理則 (2015) 「焦点化と格標示」『日本言語学会151回大会予稿集』396-401./ 下地理則 (2017) 「日琉諸語における焦点化と格標示—格と取り立ての体系的な研究を目指して—」NINJAL 平成28年度 コーパス合同シンポジウム「コーパスに見る日本語のバリエーション—助詞のすがた—」(2017年3月9日)/ Shimoji, Michinori (2018) Information structure, focus, and focus-marking hierarchies in Ryukyuan languages. *Gengo Kenkyu* 154. (発刊準備中) / Shinzato, Rumiko and Leon A. Serafim (2013). Synchrony and Diachrony of Okinawan Kakari Musubi in Comparative Perspective with Premodern Japanese, Kent, UK: Global Oriental/ Brill. 2013. / Skopeteas, Stravros and Gisbert Fanselow (2010). Focus types and argument asymmetries: a cross-linguistic study in language production, in C. Breul, ed., *Contrastive Information Structure*, 169-197, Amsterdam: Benjamins./ 高山善行(2002)『日本語モダリティの史的探究』ひつじ書房./ 竹内史郎 (2016) 「主節における主語標示ガの発達について—中央語における—」NINJAL 共同研究プロジェクト研究発表会「格と取り立て」(2016-9-19)/ Whitman, John (2015). Kakarimusubi from a comparative perspective: A crosslinguistic survey of Focus Scope Concord Constructions. Presented at International Workshop "Kakarimusubi from a Comparative Perspective", NINJAL.(2015-9-5).